

はじめに

「海ごみから革新的な社会を考える会」を主催する小木曾会長より、海ごみと『理財論』についてまとめようとお導きいただいた。考える会のズーム会議への参加を誘われ2回の参加しかなく、本質的なことは分かっていないので無理ですと辞退したが、自分なりにまとめれば良いとのことで挑戦してみることにした。前回の会議で、ある方（大学教授）が、「学生に佐藤一斎の本を渡し読むよう言ったら、読後『あれは理想ですね』と言われ返された」、とのことだった。今も耳に残り考えさせられる。

問題の所在

海ごみについて色々調べると、深刻化していつていることがわかる。とりわけ海洋プラスチック問題が深刻だ。国や企業だけでなく、一人一人のごみを減らす意識と共にその積極的な社会参加行動が海を守る、地球を守る、我々を守ることにすると気づく。そこで、国などの公、企業、そして我々がどう解決していけばいいのか、解決する仕組みづくりを温故知新（故き聖人の足跡を温めその根源誠と行を体認自得して、新しき今に活かすを知る）からどのように考えればよいか。ここにつなぐ考え方を記述する。

『理財論』で藩政改革成した佐藤一斎高弟山田方谷に学び活かさないか

～ 十万両の借財を十万両の余財とした ～

◎ 佐藤一斎とは、

岩村藩公第三子 衡 ^{たいら}より勧められ、大阪懷徳堂の中井竹山 ^{かいとくどう}に学んだ。帰る際、「困 ^{なかいちくざん}而後瘖 ^{くるしみでのちさとる}」
「^{たおれてまたおきる}休而復興」のこことばを贈られた。まさに実学のこことばだと感動する。衡は、後林家へ入り、第八代幕府大学頭 林 述斎 ^{だいがくのかみはやしじゆつさい}となり、一斎は、家塾述斎塾の門人となり、後塾頭となった。述斎は、その当時乱れていた学を、朱子学に固執することなく陽明学朱子学、是を採り非を斥ける態度で、一斎を起用し屏息させていった。このように、乱れた学をまとめた学こそ実学一斎学と言える。その裏付けは、一斎は経学解説書である『欄外書』を体認自得のうえ十冊も書きあげ、それを根底として言志四録を著し多くの人々、とりわけ西郷隆盛、佐久間象山、坂本竜馬、吉田松陰等に影響を与えた。

◎ 山田方谷とは、

その佐藤一斎に学んだ一人で、備中松山藩の貧農商家出身ながら5歳から新見藩儒に学び、でも両親亡き後15歳で家業を継ぎ一家の主として家族を養っていた。それでも暇を見つけては経学誦読していると藩主 板倉勝職 ^{いたくらかつね}に見いだされ、二人扶持給され京遊学認められた。帰藩し25歳で名字帯刀許され藩校会頭に任じられた。が、間もなく罷め、佐藤一斎塾に実学『古本大学』や『中庸』等学んだ。そこで『理財論』をまとめ32歳で「^{おのれをつくす}盡己」の扁額を贈られ帰藩した。そして藩校学頭を命じられ藩士子弟を教え藩主の侍講をしながら、34歳の時家で塾を開き身分に関係なく子弟教育を始めた。後多くが藩政改革に加わる。

新藩主 板倉勝静 ^{いたくらかつきよ}封を継いだ方谷45歳の12月、元締役兼吟味役 ^{もとじめやく}を命じられたが固く断るも遂に拝命。そこで、腹を括り先にまとめた『理財論』を実践し改革をすすめた。

備中松山藩の藩政改革の成果を今に活かす

成果は、困窮の極みにあった藩借財十両を重役拝命後七年間で十両の借財を十両の余財とするなど藩政改革を成したことを始め枚挙に遑がないが、ここではその『理財論』誕生の背景と具体策についてみていき、今に活かすことを考える。

◎『理財論』誕生の背景

困窮の極みにあった備前松山藩の貧農商家に生まれたが、名字帯刀許され藩校会頭を命じられても、すぐに罷めた。なぜか。その26歳の時の随筆でわかる。憤の一字以て立志したのだ。

「武士に採りたてられ俸給も大幅に増えた。夜書をよんでいると、俄かに思いがよぎってくる。藩の皆は相変わらず貧しさに苦しんでいる。己だけよければいいのか・・・、そんな自分に疑いをもつ」

「一生の業を終えたとき、何を成したといえるのか。深夜これを思うと憤り悲しみ、ひそかに涙を流す。身は奮い尽さない。時は明らかだ（今だ）。智力にまかすのではなく気力奮い励むことを続けることに心を用いる。英雄は切磋琢磨し自ら学び修めたので功を成した。そこで我心は定まった。悲しみは止んだ」「門の外に立つと、村人が年貢を納めるため連なって前を過ぎていく。これを見ていきどおり嘆く。ああ、民の苦しみははなはだしい、と。お上も民もその俸給を尽くしても経済はよくなるまい。無縁の大商人を肥やすだけになるのだ。これがどうして、先君の国を建て民を幸せにしようとした心といえようか。」

◎『理財論』実践し成果

そこで、26～29歳まで京で、30歳から32歳まで江戸佐藤一斎塾で学び、藩政改革具体策『理財論』をまとめ、45歳で元締役兼吟味役拝命し48歳で郡奉行拝命し民政も実践し十両の藩借税を十両の余財とするなどして、皆を豊かに幸せにした。その内容は、①理財の現状と理想からみた課題。②課題の要因と具体。③理想の本末。④課題解決のため取り組む具体、となっている。その具体策の冒頭には、明主と賢相が現状を誠に省みて事の外に立ち事の内に屈せず取り組むことだという。まず、①義理を明らかにして人心を正し、②うわべの風土でなく実質の組織風土、人情を敦くする（※私見：このように個を変え、組織の雰囲気を変えると、皆が生き生き活潑地となりそれぞれ持ち場で自分の役割を果たすようになる経験が何度もある）。具体的にはつまり③賄賂を無くして役人を清くし、④民を撫し生活生活を豊かにする、⑤昔からの道義を尊び教育を盛んにする、⑥士気を高め武備を張る、として取り組み維新までには二十万両の余財とし、又明治になっても活躍する人物を多く輩出する成果を上げ続けた。

海ごみの問題に活かさないか

海ごみは、①自然災害からのごみ、②事故からのごみ、③漁具等からのごみ、④工場からのごみ、⑤日常生活からのごみなどがある。前2者は、その都度対策されてきた。③④についても近年各漁業組織或いは各企業でSDGsの意識も高まり問題意識も高まり取り組まれつつある。⑤についても極力ださない努力、リサイクルの取り組みはなされている。しかし、マイクロプラスチックの海汚染は進みつつあり、人体に影響を及ぼすようになることが危惧されている。

そこで、各地で各企業・組織で一斉清掃活動などが行われ数十万人にも及ぶ取り組みもなされつつある。

が、ペットボトルの回収などはまだまだ我々の努力が要するという。

また、海ごみを回収し、エネルギーに換え産業化できないかなどの取り組みもなされつつある。それぞれの専門分野での奮起が解決につながる。そのための意識を高く持ち続ける学も情報交換等も重要である。

このような現状を鑑みて、『理財論』の具体策にある如く、まず、佐藤一斎や山田方谷等が求めた理想と現実との乖離を解決するため学び（例えば『古本大学』や『中庸』等を）、人心を正し、社会の雰囲気を変えることが要ると考える。つまり、理も要るが心、情、氣力を奮いおこす学びもしながら意を誠にすると、条理は自ずから立ち格物しなければならなくなる。（これらは、一斎塾で学んだ『古本大学』や『中庸』に説いている）。即ち課題解決の計画は立ち誠以て篤く実践し、出来るまで評価改善を繰り返せば成果は上がり続けると考える。策を産むにも策を実践するにも学による誠が肝要。理想を現実化することがたいせつなのではないか、と考える。

海ごみの問題は、すべてのものの SDGs

今、災害ごみ、日常生活ごみ等をリサイクルして産業化されつつある。また、組織して多くの人々が一斉にごみを集める営みを続けておられる。さらには、港ごとに或いは漁港ごとに海ごみを減らすことを申し合わせ取り組まれているが、目の前のごみ、「所謂、重箱の隅を突くだけの考え方では、世界中の海ごみは片付かない」という社会問題である。この社会問題を解決する訓えに、2つある。

佐藤一斎の訓えに「着眼高ければ、即ち理を見て岐せず」があり、又、昭和期の歴代の総理指南役であった安岡正篤氏は政事には思考の三原則が必要であると、訓している。

- 長期的思考：目先に捉われず、長い目で見える。
- 多面的思考：物事の一面だけを見ないで、出来るだけ多面的・全面的に観察する。
- 根本的思考：枝葉末節にこだわることなく、根本的に考察する。

海事に精通する実践者や指導者と全国で自ら資源回収を実践した指導者たちが循環プロバダーとなって、海洋環境が改善できる技術者を一堂に集め、他人と他人を結び、至誠を学ぶことで解決の道が拓ける。

この至誠に学び、我々の日々の生活も意識を高め見直していく学びと実践、一隅で一燈を点す取り組みは、それが万燈となり全世界を点すことになる。つまり、佐藤一斎学、山田方谷学の実学にいう、「利を以て利とするのではなく、義を以て実践すると自ずから利は生じる」ということを時の指導者は語っている。

これこそが、佐藤一斎の言志録2条「最上は天を師とし、その次は人を師とし、その次は経を師とす」、3条「凡そ事を作すには、須らく天に事うるの心有るを要すべし。人に示すの念有るを要せず」ではないか、である。また、これは、西郷隆盛と高橋泥舟・山岡鉄舟・勝海舟三舟との交渉で江戸無血開城につながり、その敬天愛人の心は、稲盛和夫の経営理念につながり今に生き温故知新は息むことはないのか、である。

また、『古本大学序』10「感応する意が誠なら自然に条理が立って格物しなければならなくなる」如く、人間学び意が誠なら、自分の立場立場で良知良心に基づき実践しなければならなくなるもので、そうなって計画実践評価改善を篤くできるまで諦めることなくしていくことで成果がでる。だから、過去及び現在の英俊雄傑は事を成せたのである。今私にできることは何か。そこを学び、どんなに小さくみじめなものであってもできるところからできることでして一燈を点していきたいと念じます。以上